



経済アナリスト

森永康平

経済アナリスト・森永卓郎氏の長男として所沢市で育った森永さん。
家づくりは、家族でも互いを尊重する「個の自由」にこだわりました。

森永康平（もりながこうへい）

1985年埼玉県生まれ。運用会社や証券会社で日本の中小型株のアナリストや新興市場のストラテジストを担当。2018年に金融教育ベンチャー「マネネ」を創業、CEOを務める。アマチュアで格闘技の試合にも出場している。著書に父、森永卓郎氏との共著『親子ゼニ問答』（角川新書）など。

家族の団欒を、自由な距離で。 「一緒」も「ひとり」も大切にする

所沢の戸建てで育ち、就職を機に上京。 3人の子どものためマイホームを購入

出身は埼玉県所沢市で、両親と弟の4人で戸建てに住んでいました。父は早朝から夜中まで働いており、平日に顔を合わせたり、遊んでもらったりした記憶はありません。土日もずっとリビングで仕事をしていましたが、今思えば働く姿を見られたのはよい機会だったかも。子どもが父親の仕事を目にする機会は少ないですからね。

僕と弟は、それぞれ個室を与えられていました。4歳離れているので取っ組み合いの喧嘩をすることはありませんでしたが、性格も趣味もまったく違うので、一緒の空間にずっと居たら陰鬱な雰囲気になっていたかもしれません。自分だけの空間で好きなことに集中できたのはありがたかったです。だから、僕も子どもができれば個室を作ってあげたいと思いました。

家を出たのは22歳の時。就職先のオフィスは六本木にあり、実家からでも通えました。でも、実家で猫を飼い始めたタイミングで、猫アレルギーであることが発覚して……。経済合理性だけを追求するなら、家賃や生活費が浮く実家暮らしが一番良い。でもそれは叶わないとなると、次に僕が考えたのは「通勤時間の削減」でした。どうせ家賃を払うのであれば、多少高くてもいいから会社の徒歩圏内に住んだほうがいいと思ったんです。

この判断が正しかったと知るのは、東日本大震災の時でした。遠方に住んでいた同僚は5時間かけて自宅に帰ったり、ホテルがどこも満室で泊まれなかったりと、大変な思いをしていたからです。震災が起こることを予測したわけではありませんが、結果的によい判断でした。その後、一駅離れた場所に一度転居して、結婚を機に広めの部屋に引っ越し、3人目の子どもが生まれた頃、一軒家を購入しました。今41歳ですが、最初の22年間は埼玉、その後19年間は東京都内で暮らしています。

外装や内装のこだわりはまったくなく、妻の好きなようにしてもらっています。逆に、立地にはこだわりました。まず最寄り駅から徒歩5分以内であること、実家まで電車1本で帰れること、そして妻の親族の居住地からも比較的近い場所にあること。我々夫婦は共働きなので、子どもに何かあった時に頼れることを重視しました。

僕の理想は、家族と過ごす空間がある一方で、それぞれのパーソナルスペースが保たれている家です。より理

想に近づけるために、自分の部屋を改良しました。仕事用スペースは机と投資取引用のディスプレイが何台も並び、宇宙船の操縦席のような空間です。キックボクシングのために体を鍛えているので、仕事机の横にはベンチプレスの台座、エアロバイク、ダンベルラックがあります。「余計な作業を挟むとやらない言い訳になる」という経験則から、仕事部屋やジムを別で契約すると、習慣化の妨げになると思いました。お金もかかりますしね。だからあえて逃げられない環境を作ったんです。

ただ、改良し過ぎると妻からは非常に嫌がられるので、バレないように少しずつ進めています(笑)

父から渡された経済レポートに興味を持ち 経済アナリストの道へ

今の仕事をするようになったきっかけは、小学校での出来事です。小児喘息とアトピーの悪化を防ぐため運動を避けており、クラスメイトに交ざって遊ぶことができませんでした。友達代わりの相手をしてあげられないことを申し訳なく思った父が、ある日大量の印刷用紙を持ち帰ってきたんです。「これを裏紙に、お絵描きでもしてろ」と。学校にそれを持って行って絵を描いていると、クラスメイトから「男のくせにお絵描きなんて」とからかわれたんです。何も悪いことをしていないので納得できませんでしたが、なんだかすべてが嫌になってしまって、絵を描くのをやめました。

休み時間にすることがなくなったので、ふと「表面には何が書いてあるのだろう」と読み始めたんです。それは、当時父が勤めていたシンクタンクで間違って印刷しすぎた経済レポートでした。日本語で書いてあるので文字は読めますが、意味がまったくわからないんです。そ





幼少期に遊べなかった父・卓郎とは、 死の間際に最も多くの時間を過ごしました

れが逆に、僕の知的好奇心を掻き立てました。父に教えを請うたのですが「忙しいからダメ」と言われ、代わりにマクロ経済学とミクロ経済学の分厚い教科書を渡されました。それを小学校6年生から読み始め、大学進学の際も自然と経済学部に行くことを決めていました。

今こうして振り返ってみると、父とは不思議な関係でしたね。家にほとんどいなかったのですが、正直なところ父親としての印象はありません。何なら視聴者の方とあまり変わらない感覚かもしれませんね。むしろ大人になってからのほうが、仕事現場で一緒になったり、看病で会ったりする時間が増えていきました。だから一般的な家庭とは真逆で、父が亡くなる直前が、人生で最も一緒にいた時間となりました。

大事なのは「お金を増やす」だけじゃない。 資産性よりも居住性を重視すべき理由

経済アナリストとして気になるのは、物件探しにおいて、資産性だけで選ぶ人が多いことです。「この物件を買って将来的に価値が上がるのか」という発想は間違っていないのですが、そこに傾倒し過ぎると大事な視点を見失う

のではないのでしょうか。

たとえば、公園から近い立地、子どもの数だけ細分化された部屋、趣味に特化した防音設備……。どれもQOL（生活の質）向上には最適ですが、実は市場価値や資産価値としてはマイナスに働く可能性があります。少なくとも都内は比較的地価が上がりやすいので、資産性より居住性（住み心地のよさ）を重視すべき、というのが僕の考えです。この先何十年も住むつもりなら、尚更です。

金融リテラシーはお金に関する幅広い知識を指す言葉ですが、世間では「増やす」という運用の話に偏りがちなのはやや違和感があります。増やすだけでなく、「どう使うか」と「どう守るか」も大事な要素です。損になり得ることも、自分たちの幸福に直結する選択をすることが、真のリテラシーの姿ではないのでしょうか。そのほうが「人生という限られた時間をどう過ごすか」という投資においては、たしかな納得感を得られるはずです。

インタビュー動画は住宅金融支援機構（JHF）
YouTube 公式チャンネルでご覧いただけます
https://www.youtube.com/playlist?list=PLcb0j07XtnfKA4_r_69-mElwHrGxjyKXi

